

内閣府青年国際交流事業既参加青年調査

(1) 名 前 : Jose Sano Takahashi (ホセ・サノ・タカハシ) (ペルー)

(2) 年 齢 : 44 歳

(3) 参加事業 :

- 1) 第 11 回「世界青年の船」事業 参加青年 (1998 年度)
- 2) 第 16 回「世界青年の船」事業 ナショナル・リーダー (2003 年度)
- 3) 第 19 回「世界青年の船」事業 管理部
(「情報・メディア」コースファシリテーター) (2006 年度)
- 4) 第 21 回「世界青年の船」事業 管理部
(「情報・メディア」コースファシリテーター) (2008 年度)
- 5) 第 22 回「世界青年の船」事業 管理部
(「CSR」コースファシリテーター) (2009 年度)
- 6) 第 24 回「世界青年の船」事業 管理部 (「国際関係」コースファシリテーター) (2011 年度)
- 7) 第 25 回「世界青年の船」事業 管理部 (「国際関係」コースファシリテーター) (2012 年度)
- 8) 平成 26 年度グローバルユースリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」
(※SWY27) 相当 管理部 (「情報・メディア」コースファシリテーター) (2014 年度)

(4) 職 業 : 国際コーディネーター、異文化ファシリテーター、「オフィス・ホセ・サノ・タカハシ」CEO



■「果てしない旅」への参加のきっかけ

1999 年、当時 21 歳だった私はリマ大学で社会コミュニケーションを専攻しており、4 年生になろうとしていました。私は、ペルーにおける日本人や日系コミュニティを代表し、ペルーと日本の友好を促進することを目的とした非営利団体「ペルー日系人協会」の若きボランティアでもありました。その年は、日本人が初めてペルーに移住してから 100 年という記念すべき年であり、大々的に記念行事が行われようとしていました。私の祖父母も日本から移住しており、このお祝いは私自身の一部でもあったと感じていました。「世界青年の船」事業（以下「世界船」という。）については、数年前、第 9 回の世界船に参加した同協会の先輩方から耳にしていました。彼らは一様に、世界船が人生を変える経験、心と魂が解放される事業であり、世界と多様性へのゲートウェイであるとも話していました。そして、2 年後にペルーが再び招へいされたことを受け、第 11 回世界船に応募するよう、私に勧めてくれました。当時は団体推薦の形でしたので、応募総数は 45 人くらいだったのではないのでしょうか。今では毎回 300 人ほどが応募しますし、選考課程も異なります。そして合格し、1999 年 1 月の寒い冬の朝、横浜港で、13 か国 270 名の参加青年とともに、にっぽん丸に乗船しました。

世界船に応募した時はまだ、インターネットが始まったばかりの時代でした。私は世界の様々な文化について直接学び、議論し、日本と日本人への理解を深め、リーダーシップとコミュニケーション能力を高め、通常では行けないような異国の地を訪問できる多文化共生の場を期待していました。もちろん、これらの期待はすべて 200%達成されました。世界船は、他に類を見ない多文化交流プログラムであり、私にこれらすべて、そしてそれ以上のことを経験する機会を与えてくれました。

■ 事業で自然発生するリーダーシップ

世界船では、セミナーやワークショップ、レクチャーなどを通して様々なツールや情報が提供される一方で、参加青年が共通の関心事の下でグループを作り、多文化的な環境の中で自分たちの活動を提案、計画、実行するための時間と空間も提供されます。このようなプロセスを通して、世界船では、自信、コミュニケーション、スピーチスキルだけでなく、文化認識、ファシリテーション、交渉力、企画力、マネジメント力を養うことができました。

特に、活動の構成は、リーダーシップスキルと文化的認識を深める上で有益であったと思います。日常的に行われるリーダー・グループ活動は、信頼と信用のある多文化的なミクロの環境を提供し、そこで人間関係を深く発展させることができました。委員会は、さまざまな公式活動運営のために設置されますが、その内容は参加青年自身が提案、企画し、実行します。共通の目標を達成するために、委員会のメンバーは、意思決定のために議論し、交渉し、協力し、時にはリードやフォローをし、合意を得るために議論をファシリテートしなければなりません。しかも、締切が迫るプレッシャーの中で、そして船のように「浮かびながら動く」環境の中で、異なる背景、文化言語を持つ仲間と一緒に作り上げるのです。

これこそが、「世界青年の船」事業がリーダーシップ、文化的理解、国際協力という目標を達成するために、非常にユニークで効果的である理由だと私は思います。**移動する船という特殊な環境、狭い空間に世界中から集まった 300 人の青年が 24 時間 365 日交流から逃れることはできないこと、そして、リーダーシップが自然に生まれ、文化理解が素直な興味から生まれ、協力が真の理解から生まれ、これらの交流を通して兄妹愛を育む**という、プログラムの構成自体のことです。これらの要素は、他の交流プログラムにはなく、世界船を特別なものに行っていると思います。

■ 表敬で期待される役割に応える

寄港地活動も、プログラム中のハイライトでした。文化理解、人々の平和、国際協力のメッセージを届ける「親善大使」として船を降りた参加青年を、地元行政が歓迎してくれるのです。寄港地での表敬訪問や儀礼的な活動、特にナショナル・リーダーとしての活動は、**外交、スピーチ、国際関係の実践の場**として、私の将来のキャリアに特に有益なものになりました。日本では特に、首相表敬と皇太子ご接見があり、大変思い出深いです。表敬訪問は暑い天候の中正装をするなど、リーダーにとって大変な面もありますが、事業でリーダーとして果たす責務がありますし、青年にとってもプロトコルを学習するよい機会となります。プロトコルは、それを仕事にしているような人でない限りは、日常的に役立てるというものではありませんが、その場を経験するのはとても貴重なことです。ギフト交換の時はカメラ目線で写真撮影に応じる、背景には国旗が写っているなど、細かな所作もあります。私の服装や背景に、ペルーの象徴が入ることで、私がペルーを代表していると分かるわけです。表敬では、自分が「個人」ではなく「役職（立場）」として扱われますので、挨拶では自分の話をするのではなく、その立場（例えばペルー代表青年）が象徴していることを話します。その場に適した話、期待される話というのがあるのです。香川県の地方プログラムで、ペルーとインドの青年が堅調表敬した時、私が挨拶をしましたが、この時はペルーのみならずインドの青年をも代表して話すということをよく理解する必要がありました。



第 16 回世界船での香川県庁訪問

■ 寄港地活動で「船の文化」を伝える

第 16 回ではインドのムンバイに寄港しましたが、300 人が「世界の青年」として歓迎され、首飾りをかけてくれたり、特別な席に案内下さり、まるでスターのように待遇いただきました。現地の若者との交流活動では、草の根レベルの文化交流を促進するとともに、私たちが新たに共有した「船の文化」を関係する人々に伝えることができたことは、この訪問の最も良い思い出の一つです。プログラム前半は国ごとにパフォーマンスをしたのに比べ、プログラム後半の寄港地では、各国の参加者が混ざり合い、ニュージーランドの「ハカ」や日本の「和太鼓」、ラテンの「サルサダンス」などを披露し、**文化理解と兄妹愛を実際に示す生の事例**となりました。船上で文化が生まれ、そこには文化を構成する「象徴」があり「英雄」がいて「タブー」があり、民族音楽に現れる、と大変興味深いものです。例えば船で新しい曲が 1 曲誕生するかも知れません。それを見つけて証人になるというよりは、それを自身が体感するという経験です。トップダウン型も、ボトムアップ型も、ピア（仲間）間の学びも、すべて存在しますし、誰もが学習者、表現者、という経験をします。表現者として自分の限界を超える体験は価値あるもので、それを実現しるのが、**船という閉鎖空間**であるわけです。管理部で乗船する中で、これを感じ取ったと言えるかも知れません。

■ 日本人を知り、橋渡しする機会

参加青年として初めて世界船を体験したとき、日本文化に興味を持ち、自分のルーツを探ると同時に、日本人や日本の若者を理解しようとしたことを、よく覚えています。私の少し上の三世たちは、ペルーの経済状況を受けて日本に出稼ぎに行くこともありましたが、ペルーで日本人として育てられ、日本でブルーカラーの職につき、日本語も分からず、外人と扱われ、アイデンティティ・クライシスが起きていました。私はその人たちより若かったのですが、そのような話を見聞きして、自分も日本に行ってみたい、片言の日本語で日本青年とコミュニケーションを図りました。また、ラテンアメリカの日系コミュニティについて、自主活動を行い伝えました。その意味で、世界船は、私が気づかないうちに着手しようとしていた新しい冒険への入り口だったとも言えます。日本のナショナル・プレゼンテーションから、和太鼓、茶道、武道などのクラブ活動、日本に関する講義やセミナー、そして特に日本人キャビンメイトやレターグループの友人、他の日本人と日々交流する中で、私は日本の文化やアイデンティティにますます興味を持つようになりました。

事業に参加して、日本への思いや考えはどう変わりましたか。

好奇心がさらに芽生え、2年後に日本へ行き、静岡大学で1年間、研究生として過ごしました。また、船内活動を通じて、特に日本人とラテンアメリカの人々・文化間における異文化ファシリテーションのスキルについて実感し、そして身につけることができました。これらの経験により、私は再び乗船し、第16回ではナショナル・リーダーとして、その後第19回以降は6回にわたりディスカッション・コースのファシリテーターとして、活動することとなりました。また、日本とペルー、ラテンアメリカの間の異文化ファシリテーションと言語通訳を専門にするようになり、キャリアとプロフェッショナルの道が開かれたのです。**ペルー、ラテンアメリカ、日本の架け橋となる**今の仕事は、23年前に初めて世界船に参加した時の道を、そのまま受け継いでいるのです。

日本とラテンアメリカ間のどのような違いを、どう調整していくのですか。

日本の方がペルーに来ると、生活の時間が異なるので、「午後イチ」（2時頃）のミーティングを提案すると、ペルーでは午後2時がランチ時間なため、「ランチミーティングですか？」と誤解が生まれます。また、約束の時間の10分前に来るか、15分過ぎが許容されるかという問題もあります。距離についても、ペルーの田舎の人は移動手段が徒歩となり、長い距離歩くのに慣れているので、「すぐそこ」という場所が、1、2時間徒歩ということがあります。決定プロセスや合意形成も異なりますので、日本は直接答えをくれず「確認します」となることが多いです。

通訳する時も、日本では気遣いから言葉に表現されていない思いがあるので、言葉を補って訳すことがあります。日本は落とし込みが弱い傾向にあるので、「この書類を提出してください」しか言わないところを、ペルーでは「いつが締め切り？ここは誰が担当する？質問は誰にすればいい？誰が提出する？」と詰めていく作業も必要です。そこまでしないと、誰もしないからです。このような調整が、仕事を続けることでできるようになってきました。

国際プロジェクトをコーディネートする上で、世界船ネットワークが役に立ったことはありますか。

日本との仕事をする上で、日本国大使館が窓口となっていることが多々あるため、国交省や総務省の方をお迎えする際、「世界船の既参加青年である、内閣府主催の事業に参加したことがある、管理部員を務めたこともある」とお伝えすると、有難いことにそれだけで信頼をいただけます。また、既参加青年との連携の観点からは、私の仕事は日本とラテンアメリカをつなぐことですので、例えば日本の舞踊団がラテンアメリカの数カ国を回ると言う時に、例えばチリの既参加青年と連携してコーディネートするなど、情報をやり取りすることがあります。エクアドル、ブラジルの既参加青年とも同様です。

■ 他者のフィードバックにより、体得したスキルに気づく

振り返ると、世界船が私に与えてくれたものは、強力なリーダーシップと、一連の「ソフトスキル」です。ソフトスキルとは、創造性（既成概念にとらわれない）、問題解決、チームワーク、柔軟性・適応性、ネットワーキング、時間と資源管理などで、このスキルのおかげでその後何年も個人的に、そして職業人として、発展の道を歩んでこられたのだと思っています。このスキルを得た、という瞬間を特定するのは難しいですが、他人からフィードバックをもらった時にそれを感じます。リーダーとして、ロールモデルとして、アドバイスを求められる時それを感じます。船上でも事後活動組織でも、特に若いメンバーから相談を持ちかけられると、「**あの時、あの年齢では自分ではできなかったことが、今はできるようになっているな**」「あの時の自分では、そのように考えてしまうから、できなかったんだな」と思うものです。もちろんこれも、継続的に若者と関わっているからこそ、気づけるのだと思います。

■「終わりが始まり」、事後活動組織も世界船の特徴

世界船は自己発見の旅でもあります。自分の信念、価値観、偏見と他人が対峙し、常に自分のコンフォート・ゾーンから引き離され、自分がどのように世界を理解しているかを考えざるを得なくなるような旅です。同時に、自分のスキルや長所、短所について考え、自分の得意なことや社会に貢献できることを明確にするための自信、そして親密性を与えてくれます。船という環境によってこそ、異なる背景や信念を持つ他の青年たちとの恒常的な交流が可能となり、内省から行動へのジャンプのきっかけとなり、グローバルに考え、ローカルに行動することを可能にするのですが、今や強力でグローバルな事後活動組織のネットワークによって、その力はさらに発揮されています。これは、**世界船の独自性の中でも重要な部分**でしょう。国際交流事業というのは、それがどんなに集中的なものであったとしても、参加者が帰国する時には間違いなく終わってしまうものです。しかし、世界船の場合、既参加青年の皆さんであれば、**本当の世界船は船を降りたときから始まる**、ということに同意するでしょう。それは、世界船が事後の活動を通じて、青年の社会貢献を促進するという強いコミットメントを持っていることと、それが事後活動組織として組織化され、世界中の既参加青年とネットワークできる強力な地盤があるからだと思います。

社会貢献の意識は、どう積み上げられていくのでしょうか。

ペルーでは、参加青年は応募の時から事後活動について理解しており、参加後、一生をかけて事後活動をしていくことも分かっています。参加青年にとっては、船上で既参加青年を見たり、寄港地活動で既参加青年が家族として迎えてくださる体験も、貴重です。「一生に一度の体験だと思ったら、2 度目の人がいる！」と知ったり、事後の自分のイメージにつなげていくことができるからです。船内での事後活動セッションも、役立っていると思います。そして、参加青年のやる気は、船上でどんどん蓄積していき、事業終了時に一番の盛り上がりを見せますので、何か形にする、活動にすることが必要です。「シップシック」に終わらせてしまっただけでは勿体なく、事後活動組織が「お帰りなさい」と迎え入れ、活動できる環境を整えてあげることも、必要です。

■ペルーでの事後活動組織の立ち上げ

私は第 11 回世界船参加後、他の既参加青年と一緒にペルーに世界青年の船事後活動組織を立ち上げるため、取り組みに加わりました。ペルーは第 3 回、第 9 回、第 11 回、そして第 12 回（日本人のペルー移住 100 周年）と招へいされましたが、私の参加した 11 回の後、第 12 回ではケープタウンから東京まで区間乗船する「東京会議」への招へいをいただき、「既参加青年の中から誰が行くか」を決めるため、初めて公式に集まったことが、きっかけでした。そして第 9 回メンバーが東京会議に参加し、世界船ネットワークについて考え始めました。

第 12 回メンバーが帰国し、連絡が取れる 6 回生、11 回生、12 回生が集まったところで、2000 年に次の事業広報や参加青年選考に関わりたいという意向を決めて、第 16 回（2003 年度）にそれが実現できる運びとなりました。私は日本国大使館の職員の皆さんをよく知っていたので、「事後活動組織が選考に関われますので、任せてください」と手を挙げました。この時は、「どういった人物像を求めるのか」ということを、既参加青年の立場からお伝えしながら、最終面接に加わりました。そこから少しずつ時間をかけて大使館の信頼をいただき、今や最終選考までのプロセスは全面的に一任をいただいています。

私は今でも役員会の一員として活動しており、組織はペルー人既参加青年 110 人以上からなる大きな「家族」となっています。



平成 26 年度グローバルユースリーダー育成事業「シップ・フォー・ワールド・ユース・リーダーズ」の募集説明会をする事後活動組織（2014）

■ 主な事後活動

2013 年には世界青年の船事後活動組織の第 7 回国際大会を開催し、世界各国から 100 人以上の既参加青年を迎え入れることができました。また、ペルーの事後活動組織は、第 27 回世界船や 2019 年度の INDEX の日本参加青年に対して、ペルーでの訪問国活動を実行する組織として委託され、活動しました。



事後活動組織ペルーのメンバー

事後活動組織ペルーは社会貢献活動も行っており、募金活動や児童養護施設訪問、献血、衣服や書籍の寄贈、リーダーシップ育成のためのワークショップや講演会などを行っています。複数年継続して行っているのが、クリスマスの時期にトーマス・ヘルム・センターという児童養護施設（デイケアセンター）の訪問です。ここに通う 100 人くらいの子供たちと

一日一緒に過ごし、食事を持ち込み、遊び、プレゼントを渡します。また、環境、スポーツ、ジェンダー、マイノリティ、災害リスク管理、そしてもちろん異文化理解など、さまざまな分野でペルー人青年が行う社会貢献活動をサポートしています。また、在ペルー日本国大使館の文化活動にも青年ボランティアとして参加し、マンパワーの提供、日本や日本人への敬愛の気持ち、そして世界船で身につけたリーダーシップやマネジメント力を発揮しています。



2019年に児童養護施設を訪問した時の様子



日本国大使館主催の和太鼓祭で、オリジナルの法被を着て受付サポートをする
事後活動組織メンバーおよび第32回参加予定青年（2019年）

■ 新しい事後活動のあり方を模索

私は、世界船の国際的なネットワークを維持・発展させるために、事業終了後の活動を組織的に継続するよう若い世代に常に助言し、励ましの言葉をかけています。世界船の仲間は、グローバル化し、かつ対立するこの世界において貴重な資源であり、**利己主義が溢れる世界の荒波の中で、信頼と誠意の島のような存在**となっているのです。ミレニアル世代と言われるデジタル・ネイティブの若い青年たちは、違うマインドセットを持っており、集団よりも個々で活動する傾向があり、集中的に短期コミットするというスタイルが合っているように思います。ですから事後活動組織の活動も、今の延長でなく新しい要素を入れていく、新しい取り組みをする必要があります。これまで「Think Globally, Act Locally」が一つの形となってきましたが、今はこれよりも大きなことをできる可能性があり、**グローバルな課題に挑戦する、Act Globally** にもっと挑戦すべきです。技術的にもうそれができる時代になっています。若者は自国の世代の離れた先輩とコミュニケーションするよりも、他国の同世代と協力したほうがスムーズなこともあるでしょう。例えば医療、メディアといったような専門分野で既参加青年が集まる、情報交換するというようなことができれば、自分へのメリットもより感じやすいですし、参加して楽しいと思います。船内で行う事後活動セッションにおいても、どのような活動を紹介するか、活動の種類に幅を持たせられるといいと思います。

今後はどのような事後活動になっていく可能性がありますか。

世界船事業本体にも、枠組みが用意され、参加青年が内容を作っていくというモデルがありました。事後活動組織が枠組みを作って、新しい世代に内容を考えてもらうような形が、一つ考えられるでしょう。「SWY Talks」などがよい例で、発表者になりたい人は多いと思います。そこで組織で年間計画を作る、活動の宣伝する、世界中に声をかける、というような場を用意することが、古参のメンバーには求められているのかもしれませんが、そして**参加青年の勢いのピーク（モメントム）を生かす**ことも大切なので、事業終了直後に何か活動を体験してもらい、社会のために貢献するという経験ができるとういと思います。

ホセ・サノ・タカハシ氏のプロフィール

国際コーディネーター、異文化ファシリテーター。ペルーのリマで生まれ育った日系 3 世で、「ペペ」の愛称で知られる。15 歳から日系社会のボランティア活動や日本文化の普及に携わり、大学 4 年生で第 11 回世界船に参加。1999 年にコミュニケーションの学士号、2009 年に MBA を取得。2002 年に 1 年間日本に留学、研究した後、フリーランスの通訳者として数年間活動し、2012 年に事務所「オフィス・ホセ・サノ・タカハシ」を設立。主なクライアントは、ペルーでプロジェクトを行う日本の政府機関や民間企業。一児の父親でもある。